
十六の夏

ドルフィン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十六の夏

【Nコード】

N0037E

【作者名】

ドルフィン

【あらすじ】

「あの子さ、中年のオヤジと仲良くラブホテル入ってっただよね」ある日、クラスメイトの女子からそんなことを言われて、僕は面倒事を押し付けられた。十六歳の誕生日を境に豹変した義理の妹。本当を知ることが、多分、こんな風に痛みを伴う。その痛みを受け入れて、僕たちは成長する。

1・悪夢（前書き）

現在連載中の「半熟果実」とは全くジャンルの違う恋愛物です。恋愛というより成長という要素が多いと思います。なお、勝手ながら「半熟果実」の方は少し更新頻度が遅れると思いますが、必ず完結させますので温かい目で見守ってやってください。

1・悪夢

自分の中で一番古い記憶を辿ると、あの薄暗くてかび臭い部屋に行き当たる。おそらく、その頃の僕はまだ三歳か四歳かそんなところで、その頃の僕がそこをかび臭いと認識できたかどうかは分からないけど、今思えば、そこはかび臭かったように思う。

それほど暗くはないけど、狭い部屋で、僕は泣いていた。悲しいとか、辛いとかそういう感情はまだよく分からなかったけど、あの時僕を支配していた不安感は十数年後の今も覚えているほど強烈なものだった。

薄暗い部屋の片隅で、僕は不安に怯えていた。そこから逃げ出す術も分からず、自分の中で広がる気味の悪い感情の意味も分からず、ただ、ひたすらに泣き叫ぶことしかできなかった。

硬く閉ざされた襖いすずみの向こう側からは、ピーーと耳を裂く甲高い音が鳴り響いていた。その耳障りな音に負けにくいぐらい大声で泣いていると、不意に襖が開き、母親が部屋に入ってきた。憮然とした表情で僕を見下ろす母親が目にと映ると、僕の中で気味の悪い感情はほんの少しだけ和らいだ。それでも、その直後に顔を歪める母親を見た瞬間、その光景は耳を劈つんざく高音のように、加速度的に気味の悪い感情を押し上げ、僕は今までより一層大声を出し、涙を流し、めちやくちやに泣き叫んだ。

目を見開き、唇をきつく噛んだ母親が、僕の体を何かにとりつかれたように何度も何度も叩きつける。母親の手のひらが僕の体を叩く度、パン、パンと嫌な音が鳴り響き、痛みを通り越した僕の体は、やがて何も感じなくなつた。

まるで、その行為に飽きたように、僕が泣き止んで動かなくなる
と、母親は奥の部屋へ姿を消した。少しして、部屋の中を走り回っ
ている甲高い音が唐突に鳴り止んで、部屋の中は気味の悪いほどの
静寂に包まれた。

感覚のない世界の中で、僕は虚ろに揺れる視界の真ん中あたりで、
再び僕を見下ろして立っている母親の姿を認識する。口から湯気の
立ち上るヤカンを手にした母親が、自分の顔の辺りの高さまでそれ
を持ち上げ、なんの躊躇もなくそれを下に傾ける。

わけが分からず、僕はただ黙ってその行為を見守った。

母親の笑い顔がひどく歪んで見えたのは、僕の意識が朦朧として
いたからだろうか。

あああああああは。人間味のない笑い声は、今も僕の脳裏の
底の底にこびりついていた。

2・友菜(ともな)

一日の終わりと始まりの境目に見るものは、決まって毎日同じ悪夢だった。悪夢に慣れるなんてことはないけど、いい加減毎日毎日こつ繰り返されると、ご苦労なことだと一人言ちる余裕ぐらいは出てくる。少なくとも、泣きながら飛び起きて両親の寝室まで助けを求めに行くなんて事は、中学に上がるまでには卒業した。一度、両親の性交の真つ最中に部屋に飛び込んでしまったことが、その行為を抑えるに至つた最大の要因だった。

トラウマ。精神的外傷。幼い頃、何度も連れて行かれた精神科の医者やカウンセラーが見出す答えは、どれも似通っていた。彼らのどんなアドバイスも療法も実践はすれど一向に僕の悪夢が覚める兆しは見られなかった。いい加減、医者やカウンセラーの肩書きを持った彼らが、インチキくさい人間にしか見えなくなった頃、僕はこの症状がすっかり治まった風を装った。

その頃の僕には、悪夢なんかよりも、初めて見た男と女が交わっている光景のほうがよっぽどショッキングだった。交わっていたのが実の父親と義理の母親でなかったら、どんなに気が楽だったろうと今でも思う。そうでなければ、マスターベーションの度に、二人の恍惚とした表情がいちいち脳裏をよぎることもなかっただろう。これも、一種の悪夢だと僕は思う。

僕が寝ている間にも働き続けている電灯の明かりが、寝起きの今だけは、うつとうしくしてしよがなかつた。上半身だけをベッドから起こすと、寝汗がシャツを濡らして、肌張り付いて気持ち悪い。シャツの胸元をつまんで持ち上げると、左手の甲が視界の中に入ってきた。

じつとりと湿った汗が、ぽつぽつと僕の左手の甲に浮かんでいた。その様は、まるでぐつぐつと沸騰する液体を僕に連想させて、その連想は痛みを伴い僕に浸透する。

幼い頃に刻まれた、左手の甲から手首にかけて醜く腫れたケロイド状の狂気が僕の体から完全に消え去ることはなかった。そして、まるで何かの儀式のように、悪夢の後には決まって、じくじくと昔の傷痕が痛み出す。

ぶり返してくる痛みの源を食い入るように見つめる。ぽつぽつと、吹き出物のようになるところどころ浮かんだ爛れた皮膚が、ブサイクな模様を作っていた。その模様を見つめながら、それほど、僕は昔の出来事に縛られているのだろうか、この状況がすでに答えになっているのに、意味のないことを考えてみる。

毎日繰り返し見る悪夢。いつからか、暗い場所と狭い空間が苦手になったのも、その影響だ。自分の部屋にいるときさえ、部屋のドアは常に開け放っていないといけないし、寝るときも常に電灯をつけていないといけない。そうしなければ、じわじわと傷痕が痛み出して、放っておくと気が狂いそうなほどの不安に襲われる。

じわじわと神経を侵食していく痛みにしらの不安を感じて、僕は左手を胸に抱き、体を目一杯縮込ませた。このまま、痛みが体中を駆け巡り、僕の全てが過去の狂気に乗っ取られてしまいそうな懸念が、しばらくこうしているとやがて収まることを僕は知っている。

開け放った窓の外では、リーリーと涼しげな虫の鳴き声が、リズムよく心地いい音楽を奏でていた。じめじめした夏の暑さをごまかすとはではいなくても、日中、命を削りながらひたすら蝉に鳴き続けられることを思えば、気休め程度には涼しく感じた。

「どうかしたの」

その声が聞こえたのは、本当に唐突だった。驚いて顔を上げると、開け放たれたドアのすぐ前に友菜が立っていた。驚いて友菜を見つめつつ、僕は、一体彼女はいつからそこにいたのだろうかと思案した。案の定、すぐに友菜は器用に眉根を吊り上げて「なに」と不機嫌な声を僕に向けた。どうかしたの、と声をかけてきたのは友菜のほうじゃなかったか。

「いや……どうしたの？」

僕の台詞に、友菜は心底ダルそうにため息をついてから「それ、こっちの台詞なんだけど」と声を返してきた。

「え？」

「え、じゃないよ。こんな時間に、しかも、ベッドの上で蹲すくまってちゃ誰だつて不審に思うでしょ」

友菜の口から出た不審という言葉が、僕を妙に納得させた。なるほど、僕を心配してではなく、ただ単に不審に思ったのなら、友菜が僕に声をかけることもあるかもしれない。毎夜毎夜、夜遊びを繰り返しながらも、家に帰るときは家族を起こさないように、物音ひとつ立せず部屋に戻る配慮を怠らない義理の妹ならば、とりあえず、不審な義兄の様子を無視して素通りすることもできないわけだ。

それにしても、こうして面と向かって友菜と口を利くのは随分久しぶりだった。同じ家、隣り合った部屋に住みながら、僕たち義兄妹が顔を合わせることはほとんどない。同じ高校に在籍しながら、

友菜が高校に顔を出すことはほとんどないし、生活時間自体がずれているので、こうした予期せぬ機会でも訪れなければ、僕たちが口を利くことはまずないだろう。もし、二人が同じ年ではなく、年が二、三歳離れていたら、僕たちも少しは兄妹を演じることができたはずだ。

「何でもないよ。発作みたいなものだから」

そう言っつて、僕は笑顔を作つてみた。長いこと笑つた記憶がなかったたので、うまく笑えているかどうか自信はなかった。訝しそうに僕を睨む友菜が、僕の返答に疑問を抱いているのか、僕の表情を気味悪がっているのかは分からなかった。

「それって」

その言葉を発してから、友菜は思い直したように口をつぐんだ。それが、気遣いによるものか、単にどうでもよかつたからなのかは定かではなかつたけど、おそらく、友菜が選ぶとしたら後者だろう。すでに数年前に完治したと公言した発作に、今頃、僕が襲われていようが、その事実が友菜の生活に支障を来たす理由はどこにもない。詮索がどれほどうつつとうしいものであるかも、高校に行くことを止めた時点で、友菜は身に染みて知っていた。

「どうでもいいけどさ」

本当にどうでもよさそうな顔をして、友菜はどうでもいいことを口にした。

「寝るときぐらいは部屋の戸閉めたら。物騒だし」

「別に盗られて困るような物なんてないから」

「電気。つけっぱなしで寝るの、電気代もつたいないし」

「とりあえず、親に文句言われてから考えるよ」

「あんたってさ。ほんと、つまんないね」

脈絡もなく発せられた最後の言葉も、やはりどうでもいいことのセツトに含まれているのだろうか。僕は少し考えを巡らせてみてから、そんな僕を友菜は大して期待してなさそうな顔で眺めていた。

やがて、僕が「そう」と返事を返すと、友菜は呆れたように大きく息を吐いた。君に言われたくないよ、なんて言葉を返していれば、友菜は満足したのだろうか。少なくとも、友菜のように軽々しく本心を口に出す度胸を僕は持ち合わせていなかった。

「お大事に」

そう言って、手をひらひらさせながら自分の部屋に戻る友菜を僕は黙って見送った。

「君に言われたくないよ」

相手がいなくなってから、僕は本心をなんとなく口に出してみた。独り言を呟いている自分の姿を客観的に想像してみて、すぐにその行為に後悔した。友菜の言葉を反芻して、素直に、なるほど、と納得するあたりが僕をつまらない所以だろうか。

隣の部屋から、友菜がベッドの上に倒れこむ音が漏れてきた。そ

の後、一切隣から物音がしなかったので、友菜ももう寝たのだろう
と思い、僕も再び眠ることにした。

何気なく時計に目を向けると、時刻は午前二時を少し回ったところ
だった。友菜に声をかけられてから、左手の痛みをすっかり忘れて
いたことに気づいたのは、意識が暗闇に溶け込む少し前だった。

リーンリーンと、意識の端で涼しげな音楽が鳴っていた。

3・憂鬱（ゆううつ）

これは一体なんの罰ゲームなんだ、と誰にでもいいから聞いてみたい気分だった。思わず出てしまった舌打ちにも気づかず「でさ、でさあ」と畳み掛けるように話続ける、ぶくぶくと風船のように膨れた顔をしたこのクラスメイトは、なんていう名前だったろう。女の子全てがゴシツプ好きだなんていう気はないけど、僕の席を取り囲んだ六人のクラスメイトはみんながみんな頭の悪そうな女子だった。

「そのとき私たち、カラオケ行ってたわけ」

「そうそう。亜由美なんか同じ曲何回もぶっ続けてマイク独り占めしてさあ」

「あー、なによお。私あのバンドすっごい好きなんだもん。ってか、他の歌なんてマジ眼中ないし」

「いや、いや、あり得ないからー。あれってさあ」

教室に入ると、途端にいつも一塊で行動している女子グループに捕まって、僕は今日初めてのため息をついた。その後、席につくまで付きまとわれて二度目のため息をつき、席については爛々と輝く彼女たちの好奇心に、思わず舌打ちをついていた。

教室の外では、蝉がいたるところで自分の命を力の限り燃焼させていた。炎天下の中、そこまでして彼らが訴えたいものがなんなのか僕には想像もつかなかったし、このクソ暑い中、彼女たちが額に脂汗を浮かべながら、一体なにを僕に求めているのかも想像もつか

なかった。

とりあえず、さつきから、逸れ続けて迷路の中に迷い込んだ話題の修正は、やはり、僕がしなければならぬのだろうか。地図とコンパスでもなければ、とてもそこから抜け出す自信はなかったけど、これ以上彼女たちの話に付き合いきれるほど、僕も根気強くはなかった。

「えっと。つまり、用件は一体なんなの」

どこかで聞いたことのあるアイドルグループについて盛り上がっている彼女たちに、僕はとりあえず来た道を引き返す旨を伝えた。そんな僕に、彼女たちは話の腰を折られてあからさまに「なに、こいつ。ウザッ」と言いたそうな顔を向けてきた。勝手に迷路に連れ込んできておいてなにを勝手な、とは思ったが、彼女たちに道理が通用するとはとても思えなかった。とりあえず、リーダー格の風船顔をした女子の視線だけを受け止めていると、彼女は不満気ながらも諦めたようにため息をついた。

「だからさ、私たち昨日見たわけよ」

だから、そのところをもったいぶってないでさっさと話せデブ。と心の中で毒づきながら、僕は「うん」と相槌を打った。

「工藤友菜をさ」

友菜の名前が出た途端、僕は随分間抜けな顔をしていたらしい。僕を見て、風船顔の女子はニヤリと口元に笑みを浮かべて続けた。

「そのとき、私たちみんなで街に遊びに来てただけだよ。カラオ

ケ行つて、喫茶店で時間潰して、そろそろ帰ろつて時にたまたま見かけたのよ。あれ、絶対工藤友菜だったわよ。ねえ？」

風船顔の女子がそう言うと、取り巻きの連中は「うん、そうだよ」「間違いないよ」と各々相槌を打った。それを見て、僕はなんだか友菜に同情した。

「で、工藤さんを見たからって、それが君たちになんの関係があるの」

「そこよ、そこ。私たちだって別にあんな子のことなんか構ってるほど暇じゃないわよ。でもさ、あんなところ見ちゃったら、話は別よ」

どうやら、風船顔の女子はいちいち物事をもつたいぶつて話すクセがあるらしい。そのクセは確かに風船顔の女子にあつらえたように似合つてはいたけど、似合うもの全てが必ずしも相手に対して好感を与えるとは限らない。

「あんなところって？」

「男とね。連れ立って歩いてるところ見ちゃったのよ」

「……ああ。男ね」

「それが、ただの男じゃないわけよ」

「世界一背の高いノツポとか、テカテカのスキンヘッド頭の持ち主とか？」

まるでソーセージのような肉の詰まった人差し指を立てて見せて、

風船顔の女子は、チツチツチ、と僕の顔の前で人差し指を左右に振った。知恵をつけた豚が、見栄を張って同じことをしたほうが、まだ可愛く見えたかもしれない。彼女の場合、見栄を張るところか、そのキザっぽい仕草が本気で似合っていると思ひ込んでいそうだから、たちが悪い。

「ちょっと、耳貸して」

そう言って、承諾もしていないのに、風船顔の女子は僕の耳元に無遠慮に暑苦しい顔を近づけてきた。

「実はね」

風船顔の女子が全てを言い終えて、満足そうに僕から顔を離す。僕は「それで？」と、できるだけ関心がなさそうに聞こえるような声を返した。

僕のそっけないリアクションが気に入らなかったのか、風船顔の女子が「それでって」と不機嫌そうな声を出して、腕組みをした。取り巻きの連中も一緒になって腕組みを شدしたものだから、僕は仕方なく「僕にどうしろっていうの」と付け足した。

「だから、君、工藤さんと義兄妹でしょ。あの子、ちつとも学校来ないしさ、君の方からそれとなく情報聞き出しといてよ」

「わざわざそんな回りくどいことしなくても、放っておけばいいんじゃないの」

「そういつわけにはいかないわよ。一応、あの子まだウチの生徒でしょ。勝手なことされて私たちまでとばっちり受けるなんてごめんだわ」

風船顔の女子の言うとはっちりとは、自分たちの評価が下がることを指しているのだろうか。しかし、体裁を気にしているというなら、まずダイエットを始めるのが先じゃないのか。どっちにしろ、教師にではなく真っ先に僕に相談してくる時点で、彼女たちの魂胆は目に見えていた。要は、これは彼女たちの娯楽に過ぎないのだ。そして、僕はそれを満たすための道具でしかない。

二年に上がって三ヶ月近くも経てば、このクラスを仕切っているのが、今僕を取り囲んでいる連中であることは嫌でも分かる。ここで僕が彼女たちの頼みを断れば、今後僕が高校生活を送る上でどういう扱いを受けることになるのかも、何日か前から不登校になったクラスメイトを見ていれば簡単に想像がつく。

あんたつてさ。ほんと、つまんないね。

今の僕を見ていれば、友菜はまたそう言って、呆れたように大きく息を吐くのだろうか。いや、学校生活にしがみついている僕のような姿も、友菜にはとっくに見えていたのではないだろうか。蔑みだけでなく、あの時、友菜が僕に向けた瞳には同情の念も込められていたような気がする。なんて思うのは、僕の勝手な思い込みに過ぎないだろうか。

黙って首を縦に振ると、風船顔の女子は満足そうに僕の肩を叩いてから「じゃ、よろしくね」と言って、取り巻きを連れて僕の席から離れていった。

鼻につく香水のブレンド臭が遠のいていき、やっと息苦しさから開放されて、僕は息をついた。トイレの芳香剤のほろがよほど品のある香りを纏っていることに彼女たちが気づく日は来るのだろうか。

ふと、そんなどうでもいいことを思いつく。僕の気分はさらに重くな
った。

4・日記帳

その日、夕飯を摂り終わると、珍しく綾菜あやなさんが「ちよつと、い
いかな」と言つて、部屋に戻ろうとする僕を引き止めた。仕事で家
に帰るのがいつも深夜を回る夫と、毎夜夜遊びに明け暮れる娘を持
つた義母に気を遣い、いつも、なるべくなら夕食は綾菜さんと一緒
に摂ることにしていた。お互いに気を遣い、気まずい時間をただ無
為に過ごしているだけなのは分かつていたけど、家族のために作つ
た料理を、一人で食べている綾菜さんの姿を見てからは、なるべく
なら僕も夕飯には参加するようにしていた。そんな僕に、綾菜さん
は静かな微笑を返すだけで、そんな綾菜さんを見ると、僕のし
ていることはまったく意味のないことのように思えた。

「なんですか、綾菜さん」

僕がそう言つて振り返ると、綾菜さんは静かに微笑んだ。ずっと
前、両親の性交を目撃してしまつてから、初めて僕が綾菜さんを名
前で呼んだときも、綾菜さんはこんな風に静かに微笑んでいた。で
も、あの時見た微笑は、今向けられているものより随分頼りないも
のだった。その微笑に落ち着きが戻つた頃、僕たちは家族になり、
同時に絆とか、目に見えない大切な何かとかいうものを失つた。

何も言わず静かに微笑む綾菜さんを見て、僕も何も言わずダイニ
ングのテーブルの前に腰を下ろした。対面式のキッチンカウンター
越しで、綾菜さんは洗い物を流しに置いてから、軽く手を洗い、僕
の向かいに腰を下ろした。

「なんですか？」

「うん。ちょっと、相談したいことがあるんだけど」

そう言って表情を曇らせる綾菜さんを見て、僕はその相談事かどうかというものであるのかを悟った。もつとも、滅多に相談事などしてこない義理の母親とテールを挟んで向かい合っている時点で、どうがんばってもいい予感はいなかった。

「友菜のことなんだけどね」

綾菜さんの口から出た予想通りの言葉に、僕は全力で表に出ようとする心理状態を押さえつけた。油断していると、今すぐにでも綾菜さんにメンチを切ってしまうそうで、僕はさりげなく綾菜さんから目を逸らした。リビングのテレビでは、つまらないお笑い芸人が力いっぱいはっちゃけて、出演者からひんじやく響聲を買っていた。

「ごめんね。一輝君には関係ないことなのは分かってるけど、他に相談できる人がいなくて」

綾菜さんの声に、僕は視線を綾菜さんに戻した。

「そんなことないですよ」

さらに表情を曇らせる綾菜さんに見かねて、僕は気が滅入るような台詞を口にした。

「僕たち、家族なんですから」

僕の言葉に、綾菜さんは「そう……そうだね」と自分に言い聞かせるように呟いた。それが心からのものであるのか、ただの演技に過ぎないのかは、静かに微笑む綾菜さんからは読み取れなかった。

どちらにせよ、僕の気分が軽くなるようなことはないのだけど。

「それで、友菜がどうかしたんですか」

あくまで、儀式的に僕はそんな台詞を口にした。友菜がどうかしだして、今日ですでに二月ほど経過していた。決して嫌味ではなかったのだが、綾菜さんは申し訳なさそうに顔を伏せた。

「うん。ちょっと、一輝君に見て欲しいものがあるの」

そう言っつて、綾菜さんはおもむろに腰を上げ、リビングに置かれた箆笥の中からあるものを取り出した。再び僕の向かいに腰を下ろした綾菜さんと、テーブルの上に置かれたあるものを見比べてみても、いまいち状況はつかめなかった。

綾菜さんは気まずそうに目を伏せるばかりで、とても状況説明をしてくれそうにはなかった。僕はとりあえず、状況を理解するため、テーブルの上に置かれたものを観察することにした。

見たところ、それは文庫本より一回りほど大きな、何の変哲もない書籍のようだった。しかし、すぐに表紙に「DIARY」という文字を見つけて、僕の背中に悪寒が走った。「DIARY」という文字を埋め尽くすように、ちりばめられた無数のハートマークは、その日記帳を可愛くアレンジしていたけど、この如何ともし難い状況を救い上げるには、少々パンチが足りなかった。

僕は一縷の望みにかけて「これ、綾菜さんのですか？」と恐る恐る声を出した。今年で四十三歳になる綾菜さんが、見ているだけで恥ずかしくなってくる日記帳を持っていたところで、誰も文句は言えないはずだ。が、綾菜さんは控えめに首を横に振り、僕の望みを申し訳なさそうに押しつぶした。

「これは……まずいですよ」

しばらく待ってみても、一向に綾菜さんが口を開かなかつたので、仕方なく僕は思ったことをそのまま口に出した。すると、綾菜さんは伏せていた顔をぱっと上げて、必死な面持ちで「分かつてる。分かつてるけどね」と言って、また申し訳なさそうに目を伏せた。

分かつてる。綾菜さんに悪気がないことも、綾菜さんが純粹に友菜のことを心配していることも。でも、悪気がない、心配していた、と言っても、なにをしてもいいのかというとまた話は別だ。もし、なんで今更そんなことするの、と友菜に反論されたとき、綾菜さんはどう言い訳するつもりなのだろうか。

「友菜だったら、こういうことされたらすごく怒ると思いますけど」「うん。だから、まだ友菜には何も言っていないし、中身もね、まだ見てないの。今日友菜が家を出て行った後で、部屋から持ち出して来ちゃったんだけど」

「はあ」

「さすがに、勝手に中身を見るのは気が引けるから」

なるほど。勝手に部屋に上がりこんで日記を物色することはできても、勝手に中身を見るのは気が引けるということか。しかし、良くも悪くもそこまでしてその行動に意味があることに綾菜さんは気づかないのだろうか。もし気づいていて、あえて僕を巻き込もうとしているなら、この人はとんだ食わせ者だ。

「それで、僕にどうしろって言うんですか？」

「そんな。どうしろってことはないけど。ただ、中身を見たほうがいいのかどうか迷ってて……一輝君はどう思う？」

僕は、頭の中でこの後の展開を思い浮かべた。おそらく、綾菜さんの頭の中でも、僕とまったく同じ展開が浮かんでいるのではないだろうか。口を開くのも憂鬱だったけど、今更席を立ち上がるわけにもいかなかった。

「それは、見ないほうがいいと思います。その前に、面と向かって本人と話すべきじゃないですか」

「それは分かってるけど、あの子、私には何も話してくれないもの。もう、あの子がなにを考えてるのか私には分からないのよ」

「はあ」

「友菜、一輝君に自分のこと何か話してないかな。ほら、二人とも年が同じだし、何かと話しやすいと思うのよ」

「いえ。友菜とはあまり話はしませんから」

「そう……」

そう言って、綾菜さんは額に手を当てながら、憂鬱そうに黙り込んだ。その横で、MCがはっちゃけるお笑い芸人に半ギレしながら駄目だしをしていたけど、お笑い芸人はまったく聞いていなかった。沈黙の中、視線を綾菜さんに戻すと、綾菜さんはまだ憂鬱そうな顔をしていた。お笑い芸人は、ひたすらはっちゃけている。

「とりあえず」

僕がその声を出すと、綾菜さんはあくまで控えめに顔を上げた。僕の顔を恐る恐る見上げている綾菜さんを見ると、なんだか、もう何もかもがどうでもいいような気がした。

「日記は友菜に気づかれる前に戻しておいたほうがいいですよ。一応、僕からも話してはみますから」

「……ごめんね。一輝君には関係ないのに」

「なに言ってるんですか。家族でしょ、僕たち」

そう言って、口元を無理やり引き上げる僕を見て、綾菜さんはふっと静かに微笑んだ。それがきつかけだとは言わないし、原因を全て綾菜さんに押し付ける気はない。だけど、なんだか少しだけ、友菜がどうかしてしまった理由が分かったような気がした。

テレビでは、お笑い芸人がいまだ力の限りはっちゃけていた。

5・胸のつつかえ

部屋に戻ると、僕は綾菜さんに渡されたメモ用紙を片手に、ベッドの上に倒れこんだ。仰向けに転がり、電灯に向けてメモ用紙を透かしてみると、ボールペンで書かれた神経質に丁寧な文字が光の中に少しだけ溶け込んだ。

そのメモ用紙に書かれた住所をもちろん僕は知らない。それを僕に渡した綾菜さんもそれを知らないと言い、多分友菜なら知っているはずだという素晴らしく明快なヒントとともに、綾菜さんはそれを僕に押し付けた。

なんでも、読むつもりはなかったのだが、日記の一端が偶然にも綾菜さんの目に入ってしまったらしかった。部屋から持ち出す際にうっかり日記帳を落としてしまった。その際開いたページを偶然見ってしまった。一瞬だけ目に留まったその住所らしき文字を、恐ろしく高い記憶力を発揮して憶え、忘れてしまわないうちにメモに取っておいた。

それ以上綾菜さんの苦しい説明を思い出しても気が滅入るだけだったので、僕は気分転換にテレビの電源を入れた。

さして大きくも小さくもないテレビ画面の向こう側に、さっき見たお笑い芸人の姿を探す。でも、すでに番組は終わったらしく、同じチャンネルではすでに歌番組が始まっていた。

今日初めて目にしたお笑い芸人のことを気にかけてながら、僕は華やかなアーティスト達の登場シーンをぼんやりと眺めた。三番目に登場したグループの名前が、今朝僕に絡んできた女子グループの話

題に上がったアイドルグループと同じだった途端、僕は反射的にテレビの電源を消した。どうやら、ついてないときはとことんついてないらしい。

テレビの電源を消すと、すぐに追ってきた静寂が部屋の中を包み込んだ。途方もない倦怠感の中で僕はベッドに埋もれ、全てを忘れ去ろうとした。が、そんなときに限って、頭に浮かんでくるのはパンパンに膨らんだ醜悪な顔の持ち主だった。

別に、と僕は心の中で呟いた。

友菜とあのグループが接触する機会は、今後一度だって訪れることはないだろうし、綾菜さんの友菜に対する心配が行動に移されることだって、まだまだ気が遠くなるほどの時間が必要だろう。

そう。別に、僕が律儀に彼女たちとの約束を守る必要はどこにもないのだ。

あのグループには、適当に彼女たちの満足しそうな作り話を聞かせてやれば済むことだし、綾菜さんには、すいませんやっぱり駄目でした、と適当に謝っておけば済むことだ。月並みだが、後は時間が解決してくれる。今僕が無意味に奔走するよりは友菜が自然と大人になるのをじっと待っていたほうが、よっぽど無難だ。

分かってはいる。それなのに、あの時、風船顔の女子に耳打ちされた言葉が、妙に僕の胸の奥につつかえていた。

「あの子さ、中年のオヤジと仲良くラブホテル入ってっただよね」

この苛立ちは、それを楽しそうに語った風船顔の女子に対しての

ものだろうか。それとも、友菜に対してのものだろうか。

僕は左手に持ったメモ用紙をぐしゃぐしゃに丸めてから、それを勉強机の上に放り投げた。歪いびつに丸まったメモ用紙は、頼りない放物線を描きながら、勉強机の上に着地を決めた。

「……バカだろ」

それは、誰にでもなく自分に向けて呟いたものだった。

6・無意味でも必要なこと

うだるような暑さの中、その店はぼつねんとそこにあった。駅を二つまたぎ、人気のない商店街を抜け、長い坂道を抜けた突き当たりのそこが、どうやら、メモに書かれた住所と一致するらしい。

交番でその住所の場所を聞くと、人のよさそうなおじさんは、わざわざ紙に地図まで書いて、丁寧にこの場所を教えてくれた。よければ案内しようか、と言い出される前にさつさとお礼を済ませ交番を出た僕を、あのおじさんは不審に思っただろうか。おそらく、後一分長くあそこにいたら、今頃僕の隣には人のいい警察官が朗らかな笑顔を浮かべて立っていたことだろう。

「喫茶 パ イス」

店の入り口にペイントされた難解な文字は、おそらくこの店の店名を指しているのだろう。風化して消え去った文字を修繕しないのは、訪れた客に店名を考えさせる高度な営業戦略だろうか。少なくとも、店全体から「改装はしねえ！」と頑なな意思を感じ取った時点で、この店の客になりうる人間は自ずと限られてきそうだった。

客に資格を求める店もどうかと思っただけど、一見さんお断り、と同じようなノリであるなら、僕に文句は言えなかった。確かにこの店が持つオーラは、見方を変えれば誇りになり得る。あくまで、古びた店ではなく、ここは歴史ある店なのだろう。

それにしても、この歴史ある喫茶店と友菜との間に接点を見出すことはかなりの難航を極めた。友菜の趣味嗜好なんて詳しくは知らないけど、果たして16歳の女子高生に、この店の持つ歴史の重み

を理解することはできるだろうか。

しばらく店の前で立ちあぐねた結果、僕はとりあえず店の中に入ることを決めた。朝から、風船顔をした女子のグループに「まだ聞き出せてないんだ」と平謝りを繰り返して、ようやくここまで辿りついたのだ。その代価が何もなしではとても割に合わなかった。

よく言えばレトロな、悪く言えば時代遅れな喫茶店の扉を開けると、ぎいーと蝶番が間の抜けた音を出した。外観の頑なさをまるで感じさせない店内の小奇麗な様相に、なにか騙されたような気がしたけど、気にしないことにした。

カウンター席が六つに、テーブル席が二つ。こじんまりとした喫茶店の主らしき人物はカウンター席の向こう側で、熱心に新聞を読みふけていた。奥まった場所に設置されたテレビは、今日起きたニュースを熱心に伝えていたけど、彼の耳には届いてはいなかった。

店内に流れる大げさなほどポップな音楽は、果たしてこの店の主の趣味だろうか。頑なさに惹かれてこの店を訪れた客に対して、この店の主はどう責任を取るつもりだろう。

「あの、すみません」

僕が声をかけると、難しい顔をして新聞を睨みつけていた老人は、ピクリと肩を揺らしてから、新聞にそうしていたように僕をにらみつけた。見たところ、年は六十前後だろう。若者全てに敵意を持っているようなその鋭い眼光は、裏返すとただの近眼に落ち着いた。僕がカウンター席まで歩み寄ると、老人は何度か瞬きを繰り返してから「ああ」としわがれた声を出した。

「悪いな。まだ営業時間じゃねえんだ」

老人はそう声を出すと、また持っていた新聞とにらめっこを始めた。どうやら、基本的に無愛想な人物らしい。老人に愛想を求めるのも気が引けたが、相手が客商売をしている以上、こっちもそうは言っていられなかった。

「あの、ちょっと聞きたいことがあって伺ったんですが」

僕の言葉に、老人は面倒くさそうに視線を上げた。

「あの、こちらの店の方ですか？」

「それ以外にどう見えるってんだよ」

黄ばんだシャツに、みすばらしい短パンという格好で自信満々にそう言われては、僕に返す言葉はなかった。

「すみません。あの。ちょっと伺いたいことがあるんですが」

「だから、なんだよ」

「はい。工藤友菜という名前、聞いたことありませんか」

質問を投げかけた途端、老人はいきなり僕を不審者を見るような目で睨んできた。

「工藤友菜？」

「はい。工藤友菜」

「もしかして、おめえ。そりゃあ、ボブカットの髪をみんな真つ赤
つ赤に染めた、あの風変わりな譲ちゃんのことかい」

「あ、はい。多分その譲ちゃんです」

友菜以外にも真つ赤な髪をしたボブカットの女の子がもしかしたら
いたかもしれないけど、ここに至るまでの道のりでそんな女の子
とすれ違うことは一度もなかった。

「そうかい。で、お前さんは一体なんなんですか。もしかして、あの
譲ちゃんのコレかい？」

そう言っつて、老人は器用に小指を立てて見せた。どうやら、この
老人は思っていた以上にお茶目な性格をしているらしい。悪気がな
い以上、ニタリと笑ってみせる老人に、僕からあえて言うことは何
もなかった。

「いえ。そういうわけじゃないんですけど」

僕の言葉に、老人はあからさまに気分を害したようだった。

「なんでえ。じゃあ、一体なんだってんだよ」

「工藤友菜は僕の義理の妹なんですけど」

「妹？ っつてことは、なんだ。お前ら兄妹ってわけか」

「はい。義理ですけど一応」

「そうかい……。そいつは、ちょうどいいや。こつちも、あの子のことで少し聞きたいことがあってな。ま、立ち話もなんだし、座りな」

そう言っつて一方的に新聞をぽんとカウンターのの上に投げ出した老人を見ながら、僕はわけが分からないまま、とりあえずカウンター席に腰を下ろした。老人は座っていたイスを前に寄せて、カウンターの上に頬杖をついた。

「あの」

「まあ、待ちな。物事には順序つてもんがある。年功序列つてやつだな。まずは、ワシの話を聞きな」

「はあ」

「二ヶ月ぐらい前か。真つ赤つ赤な髪した姉ちゃんがひよっこりウチの店に入ってきてよお。ウチじゃそんな若いお客なんて一人も来ねえし、なんたってあの派手な髪にほとんど裸見てえなナリしてるもんだから、怪しいのなんのつてよお。そしたらどうだい。その姉ちゃん、ワシと目が合うなり思いつきり頭あ下げってきて、私をここで働かせてくださいって言い出してくるもんだからよ」

「ちょっと待ってください」

僕は思わず老人の話を遮った。

「働かせてくださいって。友菜がそう言っただんですか」

途中で話を切られた老人は、気に入らなそうだったけど、文句を

言わず「おおよ」と大仰に頷いた。

「ってことは、友菜はここで働いてるってことですか」

僕の言葉に、もう一度老人は「おおよ」と言って大仰に頷いた。

「それでよ」

呆然としている僕を見て、しめしめとばかりに老人は続きを話し出した。

「アルバイトの募集はしてないし、そもそも七月いっぱいこの店置くことに決まっちゃまってたから、そりゃ無理だつて断つたのよ。なのに、譲ちゃん、妙に食いついてきてよお。あんまり必死だったもんで、思わず店を畳むまでの間ウチで働いてもらうことにしたわけよ。ワシも女の押しには昔から滅法弱くてよお。だはは」

老人の下品な笑い声を聞きながら、僕は想像してみた。妄想の中だけの心配を現実を持ち込み、娘の部屋から日記帳を持ち出す母親。その母親を見かねてメモ用紙片手に探偵の真似事をする義兄。その義兄に、実は義妹はアルバイトしてましたと真相をしめしめと話す老人。

これがホームドラマなら、笑って済ませられそうな話だったけど、現実なだけに、肩を落とすぐらいしかなす術はなかった。盛大にため息をつく僕を見て、老人はようやく僕の様子を気にかけた。

「ん？　どうかしたのかい、兄ちゃん」

「あ、いえ。こっちのことですから。それより、友菜のことで聞きたいことがあるって言ってましたよね」

「おお。本題はそこよ、そこ」

老人は思い出したように声を上げた。もうどうにでもなれ、と僕は心の中で呟いた。

「譲ちゃんがなんでウチに来たのかがよく分かんねえのよ。こんなこと言うのもなんだが、ウチじゃ待遇なんてあつてないようなもんだ。金が要るなら他のところあたりやいい。なのに、あの譲ちゃん、ウチをえらい気に入ってるよときた」

「それは、本人に直接聞いてみたらどうですか？」

「ああ。一度聞いてみたけど、はぐらかされちまつてよ。まあ、女心となんとやらつてな。聞くだけ野暮つてもんだろ」

「そうですね。こつそり義理の兄から聞き出すのも十分野暮ですけど」

「だはは。そりゃ、おめえ、男の性つてもんだろが」

そう言つてカウンター越しからバシバシ僕の肩を叩く老人に、僕は曖昧な微笑を返した。無愛想が第一印象な、このお茶目でお喋りな老人に、なんだか僕は少しだけ好感を抱いていた。

「僕もその原因は知らないんですけど」

そう言つて、僕はあの日を老人に話した。

五月四日。その日、僕たちは家族みんなでテーブルを囲み友菜の

誕生日を祝った。十六歳を迎えたその日の友菜は、ケーキに立てられた十六本のろうそくを吹き消し、無愛想ながらも僕たちに「ありがとう」と呟いた。そして、次の日、友菜は長い髪を首筋辺りまでばっさり切り落とし、髪を真っ赤に染め上げた。学校に行かなくなったのもその日からだ。

十六歳の誕生日を境に、友菜は別人のように変わり、僕たち家族はみんなそんな友菜の前に、ポカンとするしかなかった。

「譲ちゃんが初めてウチに来たのが、五月の頭あたりだから、変わりだした時期ってのはちょうど重なるわな」

「はい」

「ところで、兄ちゃんよ。ここに入ってきてから、何か違和感を感じねえかい」

「え？」

唐突に話題を変える老人に、僕は目を丸くして声を返した。

「だからよ。違和感だよ。何か気づくことはねえか？」

確かに、外観と内装のギャップとか、流れているポップな音楽とか、この店で違和感を探し出せばきりがなさそうだった。でも、老人が自信満々でクイズを出してきた以上、答えはもつと思ってもよらないもののような気がした。

「なんですか？」

「気づかねえのかい」

さも満足そうに老人は言った。

「ええ。一体なんですか」

「時計だよ」

「時計？」

「おう。この店には時計を一つも置いてないのさ。もちろん、営業中にはテレビもつけねえし、客には時計やら携帯電話やら、時間の分かるもんは全部預からせてもらうのよ。時間からの開放。コレがワシの店のモットーなわけよ」

「はあ」

「この店を訪れる客つてのは、一時の間だけでも時間を忘れたい、もしくは、時間の鎖から開放されたいって連中なわけだが、それは何も客だけに限ったことじゃねえよなって話だ」

ようやく老人の言いたいことを察した僕は「ああ」と呟いてから「なるほど」と呟いた。

僕は思い浮かべた。時間から開放されるという甘い錯覚を求めてこの店を訪れる様々な人々を。そして、その人たちに作り笑いを振りまく友菜を。

全ては無意味な出来事で、それでも、それは必要なことのように思えた。

「まあ、不変なんてもんはこの世のどこにもありやしねえ。見てみる。この店だって、譲ちゃんが入ってきてから随分様変わりしちゃまった。今流してる音楽も、テーブルにかかっているテーブルクロスも、椅子も、なんもかんも全部譲ちゃんがセレクトしたもんだ」

「そうですか」

どつりで、と僕は心の中で呟いた。

「もうすぐ畳んじまう店だしな。最後ぐらい若い子の感覚を取り入れてはっちゃけるのも悪くねえ。譲ちゃんにしたってな、そうなんじゃねえのかな」

「え？」

「はっちゃけてる間は、嫌なこと全部忘れられるってこった」

僕は「ああ」と呟きながらも「なるほど」とは口に出せなかった。

この店の辿る運命を忘れるためにはっちゃける老人と、なにかを忘れるためにはっちゃける女子高生。端から見ても、二人の葛藤と苦しみを理解することはとてもできそうになかった。

「無意味ですね」

僕の言葉を老人は「だが必要なこった」と言って笑い飛ばした。

それを笑い飛ばさせるようになるまで、どれほどの時間をこの老人は要したのだろう。考えようとしたけど、それが虚しい行為である

ことに気づいた僕はすぐに考えることをやめた。それから程なくして、テレビに浮かんだデジタル時計に目をやった老人が、そろそろ友菜がやってくる時間だと言い出したので、友菜に僕がここに来たことは話さないでほしいとお願いだけして僕は店を出て、来た道を引き返そうとした。そして、すぐに足を止めた。

道行くくたびれたサラリーマンや、おしゃべりに興じる中学生とも高校生とも取れる学生の流れの中に、友菜の姿を見つけたのは偶然だろうか。それとも必然だろうか。

だらだらと不規則に流れる人の流れの中で、一人だけ早足で歩く友菜は、まるで誰かにケンカを売っているみたいに、挑戦的だったタンクトップ一枚と、上着というには心もとないデニムのショートパンツは、友菜の華奢な体の半分も覆ってはいない。

真っ赤な髪色と、日焼けのない真っ白な素肌をさらして、友菜は一体誰にケンカを売っているのだろうか。

友菜と目が合う前に逆の道を引き返した僕は、しばらく見知らぬ道をぶらぶらと歩いた後、また来た道を引き返した。

頑なな意思を持つ喫茶店の横を通り過ぎたとき、ガラス窓の向こう側で、友菜が老人に無邪気な笑顔を振りまいていた。もし、ここで友菜が働いていることを知らなかったら、僕はその笑顔の持ち主が友菜だと気づくことはできただろうか。

くたびれた背広を着込んだ、中年のサラリーマンが店に入っているのを見送ってから、僕は店から離れた。そういえば、喫茶店の名前を聞いていなかったことに気づいて、僕は少しだけ後悔した。

7・なぜなぜの答え

その日、珍しく日付が変わる前に帰ってきた友菜は、珍しく僕の部屋に無遠慮に踏み込んできて、珍しく僕に「話がある」と言い出した。部屋で文庫本を読んで時間を潰していた僕は、ノックもせず部屋の中に踏み込んできた友菜にプライバシーの侵害を訴えようか考えてみてから、部屋のドアを開け放している時点でそんなものはないに等しいことだと気づいて、文庫本から顔を上げた。

僕と目が合うと、友菜は無表情のまま僕から目を逸らして、僕の返事を聞かないまま、自分の部屋へと引き上げた。どうやら、僕に選択権はないようだった。

考えてみると、僕が友菜の部屋に入るのはこれが初めてだった。同じ屋根の下で暮らしながら、友菜の部屋のドアは本人がいてもいなくても常に閉ざされていた。小学五年生だった僕に、いきなり妹になった見知らぬ女の子の部屋のドアをノックする勇氣はとてもなかった。そのうち自然に仲良くなれるだろうと樂觀していた僕が、ついに目の前のドアをノックすることは一度もなかった。

「入るよ」

閉ざされた部屋のドアを慎重に二回ノックしてから、僕は開かずの扉を開けた。中には、もちろん不思議の国も、未知の生物も用意されておらず、何の変哲もない部屋の真ん中に友菜が僕に背を向けて立っていた。

友菜の頼りない細い背中を少しの間眺めてから、僕は「えっと」と声を出した。

「入って」

僕に背中を向けたまま、友菜はチラッとだけ僕を振り返ってからそう言った。僕は「入るよ」と言いながら、一歩も部屋に足を踏み入れていなかったことに気づいて、慌てて部屋の中に足を踏み入れた。

「話ってなに？」

あまりにも白々しい台詞だったけど、他に聞きようもなかったので仕方ない。振り返って僕と向かい合った友菜は、まず開け放たれた部屋のドアを気にした後、僕を見てため息をついた。

「話の間中、ドアは開けてないと駄目なわけ」

「ごめん。開けてないと落ち着かないんだ」

「面倒な体質ね。そんなんじゃない女の子も部屋に連れ込めない」

「そういう女の子が出来てから具体的にリハビリしようと思ってる」

「あっそ」

僕の冗談をさもつまらなそうにその一言で一蹴してから、友菜は「で、話なんだけど」と仕切り直した。

「今日、とある喫茶店に私の義兄と名乗る男が来店したって耳にしたんだけど、何か心当たりはない？」

それは質問というよりは、小学生レベルのなぞなぞだった。なぞなぞの出題者は当然答えを知りながら、回答者の答えをただ待つだけだ。そして、だとするなら友菜はどこまでなぞなぞの答えを掴んでいるのだろうか。

質問に答えないでいると、友菜はじゃあヒントでもあげましょうとも言いたげに、勉強机の上を顎で示した。そこには、表紙をハートマークで埋め尽くされた、見覚えのある日記帳が置かれていた。

「私、いつも日記帳は表紙を下側に向けてしまうようにしてるの。なのに、昨日見たとき、日記帳は表紙が上になって引き出しの中になってしまわれてたわ。そして、次の日、とある喫茶店に私の義兄が尋ねてきた。これって、ただの偶然なの」

そうやって僕を睨む友菜に、僕は「分かったよ」と言って、息をついた。

「全部話すよ」

「当然でしょ」

「でも、どこから話せばいいか分からない」

「初めからよ。決まってるでしょ」

友菜のその言葉に、僕の戦意は完全に挫かれた。

「やっぱり、そんなことだと思った」

全ての事情を話し終えた後、心底面倒くさそうに友菜はため息を

ついた。

「綾菜さんは君のこと心配してるんだよ。別に悪気があるわけじゃない」

僕がそう言うと、友菜は黙って僕を見返した。反論をするわけでもなく、何かを伺おうとするわけでもなく、ただ僕を観察でもするように見つめる友菜の瞳に、僕は一体どんな風に映っているのだろう。やがて、友菜はつまらなそうに息をついた。

「分かってたくせに」

友菜の口から漏れた言葉に、僕は友菜がなぞなぞの全ての答えを理解していたことを知った。もちろん、友菜がどの時点でその答えにたどり着いたのかは分からない。ただ、昔から友菜は物事について残酷なほど察しがよかった。

「もしほんとに自分が店に来たことを知られなくなったら、わざわざ自分の素性明かす必要なんてないでしょ。あんなの目にウチのマスターが口の堅いタイプの人間にでも見えたんなら、眼科に行くことをお勧めするわ」

躊躇なく友菜は僕の行動の真意をさらけ出す。

「マスターの口から、あんたがウチの喫茶店に来たことが私に漏れることは分かった。そうなれば、当然私はあんたに追及する。あんたは仕方なく自分が頼まれてそうしたんだと白状する。綾菜さんは悪気があったわけじゃない。綾菜さんは心配してるんだ。なあ、よかったら話してくれないか。綾菜さん、心配してるんだ」

ほんと。

そう呟いて、友菜は吐き捨てた。

「あんたって、つまんないね」

僕は何も言わず友菜を見返した。

その通りだった。僕は自分の意思で取った行動を綾菜さんのせいにしていた。そうすれば、自分が傷つく心配なんてしなくて済む。どんな答えが用意されていたとしても、人のせいにしてしまえば、やり過ごすことだってできる。

この前と同じように友菜は大して期待してなさそうな顔で僕の返答を待っていた。多分「そう」とだけ頷けば、僕は傷つかずに済んだだろうし、友菜だって傷つかずに済んだだろう。でも、傷つくことよりも、僕は一人で不安に立ち向かうことにいい加減疲れていた。友菜もそうだ。一人で不安に立ち向かえるだけ大人なら、初めから友菜がなぞなぞを仕掛けてくることもなかった。友菜も、この状況を僕のせいにしてやり過ごそうとしている。それが卑怯だなんて、僕に言う資格はなかった。

「君に言われたくないよ」

僕は本心を口にした。友菜は「言うわね」と言っただけで愉快そうに短く笑う。

僕はいつか見た、舞台演劇を思い出した。あらかじめ用意された台本どおりに進んでいく物語。舞台の上で役者は役になりきり脚本の意図を忠実に再現する。

僕の本心を利用して、友菜は一体何をさらけ出そうとしているの
だろう。

「私に聞きたいことがあるんじゃないの」

そう言って、友菜はベッドの上に座り乗った。僕と目が合って、
友菜はイタズラっぽく口元に笑みを浮かべた。きつと、うまく笑え
ていないことに友菜は気づいていないのだろう。

「クラスの女子に聞いたんだ」

そう言って、僕は友菜から目を逸らした。部屋の壁に垂れ下がっ
たカレンダーは、二月前の五月の日付を意味もなく表していた。そ
の隣に吊るされたフォトボードには、いくつもの写真が隙間なく画
鋏がひで貼り付けられている。

「君が中年のオヤジと仲良くラブホテルに入っていくところを見
た」

視線を戻すと友菜と目が合った。友菜は僕と目が合うと「はあ」
と息を吐いてから目を閉じて、静かに息を吸った。

「ちっき」

そう言って、友菜は僕を見た。

「あんだ言ったよね。綾菜さんは君のこと心配してるって」

「うん」

「違つよ」

「違つ?」

「そう。あの人が心配してるのは私じゃないよ」

否定することが無意味なことは分かっていたけど、僕は「そんなことないだろ」と言って、その事実を否定した。諦めたようにため息をついて「やめてよ」と友菜の声が弱弱しく響いた。

「あの人が心配してるのは私じゃなくて、自分の居場所よ。私が問題を起こして、自分の居場所がなくなってしまうことがあの人は怖いだけ。誰かにしがみついてないと、あの人は生きていけない。例え誰かを傷つけても、誰かの大切なものを奪つても、あの人は雅之さんにしがみついて離れない。私は、そんな人の娘なの」

僕は、初めて友菜が父さんのことを雅之さんと呼んだ日のことを思い出した。そのときの友菜は、単に見知らぬ男の人を父さんと呼ぶことに抵抗を感じて、そうしただけだろうか。そのとき、友菜は僕たちと家族になる代わりに、なにを失ったのだろうか。

「平気でいられると思う?」

そう言って、友菜は笑った。あの日、まだ今より幼い友菜もこんな風に笑っていた。どうしようもなく、それでもそうしななければならぬとき、人はこんな顔をして笑うのだろうか。僕は、ただ馬鹿みたいに黙って友菜を見ていた。

「好きな人がすぐそこにいるのに、気持ちはずっと隠さなきゃ駄目。」

雅之さんは私の父親だから。あの人のものだから。私はずっと、雅之さんの娘を演じ続けなきゃいけない」

馬鹿みたい。そう言って、友菜はうつむいた。

「だからって」

それは、満たされない心を埋めるための行為でしかないのかもしれない。でも、本当にそれを埋めるための手段はそれしかなかったのだろうか。僕には、あえて友菜が自分を傷つけているようにしか見えなかった。

「そんなの間違ってる」

「間違ってたっていい」

何かを信じるように、友菜は言った。

「忘れられるなら、それでいい」

その言葉を僕に否定することはできなかった。それでも、それを認めたくなかった。気がついたら、僕は友菜をベッドの上に押し倒していた。

タンクトップの下から覗く無防備な両肩を掴んで、僕は友菜を見下ろしたまま動けなかった。無表情のまま僕を見つめる友菜の瞳は、物怖じせずに僕を見つめていた。僕は、このあまりに近い距離感に戸惑いながら、手の内に広がる頼りない友菜の感触にうろたえることしかできなかった。

「……いいよ」

僕から目を逸らさず、友菜は呟いた。

「別に、あんたでもいいよ」

初めから、僕がそうしないことを分かっていたわけじゃない。本当に友菜は別に僕でもよかったのだろう。真近で見た友菜は、悲しみに暮れているわけではなくて、ただ、諦めていた。それが喪失の先にたどり着いた答えだというなら、寂しすぎる。僕は、友菜から離れて、彼女に背中を向けた。

「分かってるよ」

背後で友菜の声が響いた。

「このままじゃ駄目だってことぐらい、そんなのとっくに分かっている」

フォトボードに張りつけられた写真の中に、父さんと綾菜さん、僕と友菜の映っている写真を見つけた。今より若い父さんと綾菜さん、そして今より幼い僕と友菜は、その写真の中で幸せそうに笑っていた。その笑顔がただの作り物に過ぎなかったとしても、心の底で僕たちが望んでいたことは、決して作り物ではなくて、みんな同じであったと信じたかった。

失ったものを切り取って貼り付けたフォトボードの横で、時間の止まったままのカレンダーが所在投げにぶら下がっていた。

無意味だと知りながら、僕はカレンダーの表紙を二枚破って友菜

の部屋を出た。

部屋に戻って、手の中でぐしゃぐしゃに丸めた紙屑をゴミ箱に捨てる。少しして、友菜の部屋のドアが閉まる音が、控えめに僕の部屋の中に流れ込んできた。

8・休日の午後

それから一週間ほど経ったある日、僕は意外な人物と出会った。

その日は、太陽がいつにもまして我が物顔でのさばった、雲ひとつない晴天だった。空を見上げると、くつきりと、挿絵の中から取り出してきたような、わざとらしさすら感じる出来すぎた青天が広がっていた。その中心で太陽が「げはははは」と下品な笑い声を上げている。きつとその下品な笑い声に嫌気がさして、雲もどこかへ行ってしまったのだらう、などと考え事をして歩くほど、そのときの僕は暇を持て余していた。

そんな暇人が散歩がてら立ち寄る場所は、趣味が読書という時点で近所の本屋ぐらいしか思い浮かばなかった。しかし、せつかくの休日だと意気込んで、わざわざ隣町まで足を運び、結局読みたいと思う本を見つけられなかった僕は、なんだかどうでもよくなって、来た道を手ぶらで引き返していた。

ぼんやりと時々空を眺めながら歩いていると、前から歩いてくる女の子と目が合った。その女の子は、僕と目が合うと、あっと口を開けて不意に立ち止まった。道端で偶然知り合いに遭遇したというようなりアクションだったけど、おそらく気のせいだろう。僕の方に女の子に見覚えはなかった。

気にせずすれ違おうとすると、「工藤君」と声をかけられた。どうやら気のせいではなかったらしい。僕は足を止めて、見覚えのない女の子を振り返った。

「こんにちは」

彼女は僕と目が合うと、今度は微笑みながら挨拶を交わしてきた。笑うと頬に小さなくぼみが見えた。そのえくぼを僕はどこかで見ただ覚えがあった。

「こんにちは」

挨拶を返しながら、僕はそのえくぼをいつ見ただろうと思案した。もう一度見れば今度は思い出せる自信はあったけど、初対面同然の女の子に「ねえ、笑ってみて」なんて言っただけの自信はなかった。

さしあたって、もう一度彼女が笑ってくれるまで、僕は話をつなぐことにした。

「えっと、なにしてるの？」

「気分がよかったから、ちょっと散歩に出てみようと思って」

彼女の言葉を僕は、天気がよくて気分がいいと受け取った。空を見上げると「げはははは」と相変わらず太陽が下品な笑い声を上げていた。憂鬱になりはすれ、間違っても気分はよくなりそうになかった。

「そう？」

上げていた視線を彼女に戻してそう声を出すと、彼女は小さく笑った。頬に浮かんだえくぼを見て、僕はその笑顔をどこで見たのか思い出した。

「そうじゃなくて」

「え？」

「私、昔から体が弱い。今も風邪をこじらせちゃって一週間も学校休んでるでしょう？ やっと、風邪が落ち着いたから、久しぶりに散歩がしたくなって」

「ああ、そういうこと」

てつきり、彼女が学校に来なくなったのは風船顔の女子のグループの嫌がらせのせいだと思っていた。少なくとも、そうなくても仕方ないと思えるほど風船顔の女子のグループの嫌がらせは陰湿で徹底していた。その標的に改めて自分がされてみると、思った以上にそれは学校生活を送る上では不自由なものだった。

「提案なんだけど」

唐突な僕の言葉に、彼女は目を丸くして僕を見た。

「その風邪は後一週間ぐらい長引かせることはできないかな」

僕の言葉の真意を汲み取ろうと、彼女がじつと僕を見つめた。僕は、その視線を受け止めながら声を出した。

「綾瀬さんが一週間学校に来なくなってる間に、嫌がらせの標的が僕に変わったんだ。後一週間あれば、標的が綾瀬さんに切り替わる心配はないと思う」

僕の言葉に、彼女は目を丸くした後、また微笑んだ。

友菜の部屋のフォトボードに張られていた写真の中に、友菜と一

緒にピースサインを向ける女の子の写真があった。おとなしそうな中世的な顔立ちをしたその女の子は、両頬にえくぼを作って控えめに微笑んでいた。

その写真の女の子と綾瀬さんが同一人物だと気づいて初めて、僕はそういえば彼女がクラスメイトであったことに気づいた。後になつてそうだと気づいたのは、きっと教室で彼女の笑顔を一度も見たことがなかったからだ。制服姿の彼女しか見たことがなかったことも要因だったけど、人の顔と名前を覚えることに気をつけない僕の性格が根本的な原因だった。

彼女の身に着けたワンピースの白が、陽光を浴びてくつきりと浮かんていた。胸の辺りまで伸ばした髪に手を添えて、彼女は「今、時間あるかな」と言った。

彼女のその言葉に僕は「もちろん」と声を返した。

「休日に隣町まで本を買いに来るほど時間を持て余してるんだ」

「それじゃあ」

そう言つて、彼女は頬にえくぼを作った。

「少し付き合ってもらってもいいかな」

「もちろん」

遠くで、蝉の懸命な鳴き声が響いていた。

9 ・人はそんなに強くないんだよ

近くの公園に入った僕たちは、木陰のベンチを見つけてそこに並んで腰を下ろした。昼下がりの気だるい空気を、太陽の熱が膨張させていた。青々と茂った芝生の上で、何人かの小学生がチームに別れて、必死になってサッカーボールを追い掛けていた。

「工藤君って、もっと器用な人だと思ってた」

彼女に倣ってサッカーボールを追いかけている小学生を眺めていた僕は、彼女の横顔に目を移した。待つてみても彼女がこっちに目を向けてくる気配はなかった。僕は、また彼女に倣い視線を遠くで走り回る小学生に戻した。

「別に自分のことを取り立てて不器用だとは思わないけど、もちろん器用だとも思わないよ。あくまで、主観的な意見だから信憑性も薄いしね。客観的な意見のほうがよっぽど信憑性がある」

「少なくとも、私から見た工藤君は、嫌がらせの的になるようなヘマはしない人だよ。他人が嫌がらせされてるのを、見て見ぬ振りをするぐらいの器用さは持ち合わせてる」

にこりとも笑わずにそう言われては「別に責めてるわけじゃないよ」なんて言われても、説得力はなかった。それでも、彼女は本当にどうでもよさそうに「そんなこと、どうだっていいことだから」と言った。

僕は、無口で大人しいという印象しかないクラスメイトの横顔を何も言わずに眺めた。僕の知っている綾瀬さやかと、今隣に座って

いる綾瀬さやかは本当に同一人物だろうか。少なくとも、僕の知っている綾瀬さやかは、大して親しくもないクラスメイトと道端で出くわしても、声をかけたりはしない。でも、教室にいるとき、確かに彼女はいつもこんな顔をして窓の外を眺めていた。

「どうして?」

そう言っただけで、やっと彼女は僕を見た。僕は不意に彼女と目が合っただけで少し戸惑いながら「どうして?」と聞き返した。

「どうして、嫌がらせされることになったの?」

面と向かってそんなことを聞いてくる彼女が納得しそうな嘘を考へてみてから、僕は諦めた。本当のことを話したほうが、考えないで済むだけはあるかに楽だった。

「ある日、風船顔の女子のグループが僕に相談を持ちかけてきた。彼女たちは、街で遊んだ帰りに友菜が中年のオヤジとラブホテルに入っていくところを目撃した。同じ高校に通う自分たちの体裁を気にした彼女たちは、僕に友菜に直接その件に関して聞き出してくるよう頼んだ。僕はそれを引き受けたけど、結局何も聞きだせずに、僕は彼女たちの機嫌を損ねてしまった」

彼女は困ったように笑って「だから、それがどうして?」と聞き返してきた。まるで僕の心中を推し量ったような優しい声に、僕は彼女が全てを知っていることを知った。彼女が友菜の友達であるなら、ここで僕たちがこうしていることも偶然ではなかったのかもしれない。

「なんとなく、嫌だったから」

「それは、彼女たちに作り話をでっち上げて聞かせること？ それとも、本当のことを話すこと？」

「さあ。多分、どっちも」

「そういうのを、不器用って言うんだと思う」

「そうかな」

「そうだよ」

そう言って、彼女は僕から目を逸らした。

「自分が傷ついてどうしようもないとき、きっと人は二通りのうちのどちらかしか選べないから」

彼女の横顔を僕は眺めた。いつも教室から窓の外を見つめている彼女がそこにいた。孤独の中で、その行為の中で、彼女は一体なにを見出そうとしているのだろう。

「自分を傷つけるか、他人を傷つけるか」

彼女の言葉を聞きながら、僕は左手の火傷の跡に触れた。嫉妬と執着が生み出した、醜い傷跡。そのとき、僕の母親はどんな形であっても僕に自分を残しておきたかったのだろうか。その猟奇的な願いは、今も僕の心と体に刻まれている。

「友菜も自分を傷つけるしかなかったんだと思う。あの子、不器用だから」

「でも」

そう言っつて、僕は火傷の跡から手を離した。

「傷で傷は埋められないよね」

「分かってる。それでもね」

自分に言い聞かせるように、彼女は言った。

「人はそんなに強くないんだよ」

僕は、何も言えずに彼女の横顔から目を逸らした。芝生の広場で、小学生はまだサッカーボールを無邪気に追いかけていた。僕たちが失ってしまったものを、彼らはその意味も知らずにはしゃいでいた。僕たちは、木陰の中から、遠くで浮かぶその光景をただ眺めることしかできなかった。

「工藤君、左手に火傷の痕があるよね」

不意に彼女はそう言っつて、僕の左手に目を落とした。僕は「ああ、うん」と返事を返して、反射的に左手を右手で覆った。

「そのこともね、友菜は気にしてる」

そう言っつて、曖昧に微笑む彼女を僕は黙っつて見守った。彼女が、どこまで友菜から事情を聞いているのか知らないけど、その微笑みは全てを知っつてなお向けられているような気がした。返事に困っつて
いる僕を見て、彼女は微笑んだまま言っつた。

「最後にひとつ質問してもいい？」

「うん」

「工藤君は友菜のことが好き？」

「好き？」

思わず僕は聞き返した。彼女は、微笑んだまま少し首をかしげた。

「黙秘権」

僕がそう言うと、彼女はくすつと笑った。

「あなたが義理でも兄妹だつてことは知ってる。でも、私はそれがおかしいとは少しも思わないよ。問題ではあるけどね」

「それは頼もしいね。どうもありがとう」

「どういたしまして」

そう言つて、彼女はベンチから腰を上げた。顔を上げると、彼女に降り注いだ木漏れ日が入って、僕はとっさに顔をしかめた。僕の顔を見て、彼女はまたくすつと笑つてから「じゃあね」と言つて、ベンチから離れていった。

弁解する間もないまま、彼女は公園を出ていった。

10・夏休みに向けて

夏休みに向けて、慌しく夏が動いていた。悪化の一途を辿る太陽の下品な笑い声に影響され、浮き足立つクラスメイト。ヒートアップする蝉の挽歌。嫌がらせの対象が僕からまた綾瀬さんに戻った。風船顔の女子のグループは、友菜のことなどすっかり忘れて、綾瀬さんの興味を窓の外から自分たちに向けようと一生懸命だったけど、おそらく綾瀬さんの目に、彼女たちの姿が映ることはないだろう。彼女の見ている景色に興味はあつたけど、窓の外を二分ほど眺めてから、僕はその行為に飽きて止めてしまった。

一通りの嫌がらせをこなした後、もうやるのが他に見つからなかったのだろう。風船顔の女子のグループは彼女を取り囲み、四方八方から中傷を飛ばした。

風船顔の女子のグループは、まず彼女の左手の手首に刻まれたりストカットの痕を話題に挙げた。その理由について、彼女たちは彼女たちの思いつく限りの原因を口にし、それを笑い飛ばした。

僕はあの時の彼女の言葉を思い出して、彼女が今ここにいる意味を考えてみた。一歩間違えれば命を落としていたかもしれない行為の末に、今彼女がここにいる意味。その意味を見出すまで、きっと彼女はずっと遠くを見つめているのだろう。

無意味でも、それは必要な行為で、やっぱり僕にはその答えを見つけることは出来そうになかった。

窓際に座る彼女の横顔は、この教室の中で誰よりも大人びて見えた。

終業式を終えた帰り道、僕は駅を二つまたいで、例の喫茶店に足を運んでいた。明日から意味もなく長い休暇が始まる。でも、そのメリツトを風船顔の女子たちを視界に入れないで済むことぐらいしか見つけられない憂鬱を引きずった頭の中で、なぜか時間に置き去りにされた喫茶店が浮かんだ。それがポジティブな思考かどうかは分からなかったけど、あの老人の上品な笑い声を思い出すと、憂鬱はだいぶましになった。

古びたドアを押して店内に入ると、蝶番ちょうばんの寂れた音に気付いた老人が、カウンターの向こうで、新聞からひよっこりとこちらに顔を見せた。それから、老人は僕と目が合うと、手にしていた新聞をたんでカウンターの上に放り、口をへの字に曲げて、まるで子供みたいな顔をして、子供みたいなことを言った。

「なんでえ。この間の文句でも言いに来たのかよ」

そういえば、僕がここに来たことを友菜には言わないでくれという約束は、その日のうちにアツサリ破られたのだった。別に期待してませんでしたからいいですよ、なんて言えばそれはそれで怒られそうだった。どちらにしても、全く客商売には向いていないこの老人の顔を見られただけで、僕はだいぶ満足していた。

こちらに敵意がないことを表すために曖昧に微笑んでみると、老人は拍子抜けしたように僕から目を逸らした。

「言っとくけど、譲ちゃんならもう二日前にここを辞めてったぜ」

「そうですか」

「なんでえ。そのことじゃねえのかよ。だったら、何の用だい。もうじき畳んじまう店に若い者が喜ぶもんなんでなんもねえぞ」

もう一度曖昧に微笑んでみると、老人は不審そうに僕を見た後に、息をついてからカウンター席に座るよう僕を促した。

店内に流れる気取ったクラシック音楽は、いい意味でも悪い意味でも、この店によく馴染んでいた。派手に飾られたテーブルクロスや小物も取り払われた店内は、以前来たときに比べて一気に老け込んだような気がした。もうじき畳んじまう店をわざわざリフォームする意味をカウンター席の向かいに座る老人を見ながら考えてみた。

「まあ、いつまでもはっちゃけたままってワケにもいかなえわな」

カウンター席に座る僕を見て、老人は唐突に言葉を発した。目を

丸くする僕を見て、クツクツと笑ってみせる老人は、もしかしたら僕が思っていたよりずっと大人だったのかもしれない。

「兄ちゃんは初めてだったよな。これが本来のワシの店のありようだ。渋いだろ？」

「いいですね。年季を感じます」

僕の形だけのお世辞に、老人は形だけ満足そうに笑った。

「ま、はっちゃけたまま終わるってのも悪かあねえけど、いい加減疲れちまうしな」

「いい歳ですから」

「抜かせよ、この」

屈託なく笑いながら、老人はカウンター越しに僕の肩を小突いた。

「で？ 譲ちゃんがらみじゃねえなら、今日は何の用で来たんだ？」

「用がないと来ちゃいけませんか？」

さすがに、あんたの顔が見たかった、なんて言うのは憚はたかられたので、質問に質問で返してみた。もちろん「ああ、いけねえな」なんて返答が返ってくるとは僕も思っていなかった。

「いけないんですか？」

「当たり前だろ。ここに来ていいのは時間を忘れたい奴だけだぜ。」

兄ちゃんが来るにはまだ早すぎるだろうが」

「でも、友菜は通ってましたよね」

「譲ちゃんは特別だ」

「特別ですか」

「おう、特別だ」

しばらく僕たちは見つめ合った。

「好きになっちゃいけない人を好きになっただとよ」

くるつと僕に背を向けた老人は、仕方ねえなあ、という感じで声を出した。

「長いことずーと好き続けてるらしい。まあ、ワシもそれ以上詮索するほど野暮じゃねえから、詳しくは知らねえけどよ」

僕は、嬉々として、相手は誰なんだ、ええ？ と友菜に詮索している老人を想像した。もちろん、その可能性は否定も出来るけど、友菜がこの人にその話をする気持ちはよく分かった。多分、友菜もこのお茶目な老人に好感を抱いていたのだろう。

「ここを辞めてく時、譲ちゃんに聞いたんだ。答えは出たのかい、つてな。すると、譲ちゃん、なんて答えたと思う？」

「なんて答えたんですか？」

僕は老人のしわがれた背中を見ながら声を返した。相変わらず黄ばんだシャツを今日も老人は愛用していた。

「何にも答えなかったよ。ただ、別れ際に見せた笑顔はどこか寂しげだったぜ。最後の最後まではぐらかされちまった」

「そうですね」

「だから、譲ちゃんは特別なよ」

「なるほど」

なんとなく、老人の気持ちは理解できた。

「兄ちゃん、譲ちゃんの兄ちゃんなんだろ。だったら、妹のことしつかり支えてやんな」

そう言つて老人はくるつとこちらを向いて、まっすぐ僕を見つめた。老人の芝居じみた言動に真面目に付き合うのは照れくさかったので、僕は老人を見つめたまま、はぐらかした。

「僕と友菜は義理の兄妹ですけど」

「馬鹿野郎。みみっちいこと言つてんじゃねえ」

「はあ」

「つたく、兄ちゃんよ……いい加減譲ちゃんの気持ちに気付いてやれよ」

「はあ」

「この鈍感野郎が。譲ちゃんの好きになっちゃいけない人つてのは、兄ちゃんのことなんだよ」

すっぱりと言い切る老人に、僕は目を丸くした。そんな僕に老人はしてやったりと、得意気な顔で少し胸を張って見せた。いや、それ勘違いですから、と突っ込むタイミングを逸した僕は、とりあえず「友菜がそう言ったんですか」と、控えめに突っ込みを入れた。

「馬鹿野郎。勘だよ勘」

「勘ですか」

「ただの勘じゃねえぞ。大人の勘だからな」

「大人の勘ですか」

どちらにしろ、自信満々な老人に真実を語るのは忍びなかったので、黙っておくことにした。すっかり影で友菜の恋の手助けをしてやったつもりでいる老人に、いろいろとためになるアドバイスをもたらってから僕は、喫茶店を出た。

外に出ると、相変わらず太陽は下品な笑い声を上げていた。来た道を戻りながら、長い坂道を下る途中で、僕は後ろを振り返った。

長いアスファルトの道路の先は、熱気が立ち上って視界をぼんやりと揺らしていた。坂道の頂上の突き当たりにあるはずの喫茶店は、この夏が終わる頃にはなくなってしまう。

僕は、老人の嘆きにも似たため息を思い出す。

「この店を畳んだら、ワシも息子夫婦の厄介になるんだ。死んだばあさんと始めたこの店は、出来るなら死ぬまでやり通してやりたかったけどな」

今、僕の胸をよぎったものを切ないというほど、僕と老人は親しくはなかった。多分、失くしてしまうものの前では、誰しも人は、こんな風に立ち止まって振り返ることしか出来ない。

僕の横を自転車にまたがった小学生の集団が勢いよく通り過ぎていった。長い坂道を懸命に駆け上がっていく彼らの小さな背中は、やがて坂道の向こう側に消えていった。

11・旅立ちの儀式

その日の夜、友菜が僕の部屋を訪れた。あの一件から今日までの十日間、友菜とは顔を見ることはあっても、言葉を交わすことはなかった。

「今、暇？」

暇そうにテレビをぼんやりと眺めていた僕に、友菜は律儀にその声をかけてきた。僕と目が合うと、友菜はばつが悪そうに僕から目を逸らして、言った。

「ちょっと、今から付き合ってよ」

僕は、友菜の横顔を目を丸くして眺めた後に、この十日間のブラントクを破って、友菜が僕を誘っている意味を考えてみた。十六歳の女の子の考えを察してやれるほど大人ではなかったけど、初めて僕を頼ってきている義妹の誘いを断るほど、僕も野暮ではなかった。

「うん」

僕の返事を受け取ると、友菜はもう一度僕の目を見てから、何も言わずに廊下を歩いていった。

僕はテレビの電源を消して、部屋を出た。

見上げると、ぼつかりと口を開けたような満月が空に張り付いていた。夜の空に浮かぶ数え切れない星の中に、心許ない記憶に残っている正座の名前を探してみたけど、首を上げたまま歩くのに疲れて、すぐに止めた。

それなりにロマンチックな夜空の下を、僕はバケツを右手に持って、黙々と歩いていた。そんな僕の少し前を先導するように歩いている友菜も同じく黙々と歩いていた。

これからなにが起ころのか、今どこに向かっているのか、なぜバケツが必要なのか、聞きたいことは山ほどあったけど、家を出てから前をさきさき歩いていく友菜の背中からは、何も聞くな、と言っているような気がしたので、僕は何も聞かずに時々夜空を眺めながら歩いた。

程なく歩いた後、友菜は躊躇なく公園の中に入っていった。僕は、もういいだろうと思って、公園の入り口で立ち止まった。

「ねえ。僕はこれからなにに付き合わされるの」

僕の声に、友菜は公園の真ん中あたりで立ち止まってから、僕を振り返った。

「旅立ちの儀式」

「旅立ちの儀式？」

「旅立ちの儀式」

まるでしりとりのように僕たちの間で交わされたキーワードは、まったく質問の答えになっていなかった。とにかく、夜の公園と意味も分からず持たされたバケツをヒントに答えを探してみたけど、僕は首を傾げることしか出来なかった。

公園の入り口で突っ立っている僕に友菜は「いいから、入りなよ」と声をかけて、しよっていたナツプサックをベンチの上に下ろした。僕は公園の入り口からそんな友菜を眺めてみてから、結局、ベンチの傍まで歩み寄った。

旅立ちの儀式の準備に取り掛かる友菜を、僕は横に立って見守った。

ナツプサックから取り出されたものは、手持ち花火の詰まった袋だった。それを手にした友菜は答えを提示するとともに、珍しく僕に微笑みかけてきた。

夜の公園と、意味も分からず持たされたバケツと、手持ち花火の袋。旅立ちの儀式。その方程式の証明はとも出来そうになかった。

でも、提示された計算式をこなせば、自ずと答えは出てくるのだらう。僕は、友菜に曖昧に微笑み返してから、バケツに水を汲んだ。

確か条例で夜に公共の場で花火をするのは禁じられていたはずだった。試しに、それを友菜に言ってみただけど「馬鹿じゃないの」と返された。確かに、馬鹿みたいだった。

友菜がショートパンツのポケットからマッチを取り出して、僕の手持ち花火の先端に火をつけた。ちろちろと先端の紙包みを燃やした赤は、火薬に達して緑色の火花を噴いた。花火をするなんていつ以来だろう。そんなことを考えながら、まばゆい光を見つめていると、両手に手持ち花火を持った友菜が僕の隣に立って少し身をかがめた。

慎重に手持ち花火の先端を噴き出す火花に近づける友菜の真剣な横顔を、僕は黙って見守った。手にした手持ち花火が音を鳴らすと、友菜は「わ」と短く声を上げた。

赤、緑、紫、オレンジ、様々に発光して散っていく手持ち花火は、すぐにバケツの中をいっぱいにした。五袋も手持ち花火のセットを持ってきていた友菜に、二人でやるには多すぎるんじゃないかと言ってみたものの、気がつくのと全ての袋を二人で開けていた。

こんな風に時間を忘れて夢中になったのはいつ以来だろう。手持ち花火を両手にはしゃぐ友菜につられて、僕も時間を忘れていた。

「最後はやっぱこれだよな」

そう言って、友菜は愉快そうにナップサックの中から線香花火の詰まった袋を取り出した。その用意のよさと、打ち上げ花火を用意

していない友菜の気配りに、僕は苦笑して、友菜から線香花火を受け取った。

硝煙の匂いの残った公園の片隅にしゃがんで、僕と友菜はゆっくり上ってくる控えめな火花を、注意深く見守った。細い線を撒き散らしながら、小さな円を作って燃え上がる線香花火。

そつとそこから目を逸らして、隣にしゃがむ友菜の横顔を覗いた。少しの間、そうしていると、友菜は自分の線香花火を見つめたまま、独り言を呟くように声を出した。

「あんだ、さやかに会ったよね」

返事を返すのに一呼吸置いたのは、綾瀬さんの下の名前に馴染みがなかったからだ。僕が「うん」と返事を返すと、友菜はやっぱり線香花火の火花を見つめたまま、言った。

「さやかさ、半年前に弟を事故で亡くしてるんだよね」

「そつ」

「弟とは歳は一つしか離れてないんだ」

「うん」

「弟のこと、好きだったんだって」

友菜が好きという言葉に託した綾瀬さんの想いを僕は想像してみた。それが血のつながった肉親に向けるものだったとしたら、悲しすぎる。そうじゃなかったとしたら、切なすぎる。どちらにしろ、

僕に彼女の傷を押し量ることなんて出来そうになかった。

「辛いだろうね」

口に出すには軽々しすぎると分かっていたけど、僕にはその言葉を返すしかなかった。そんな僕を責めもせずに、友菜は言った。

「どっちが痛いのかな」

「え？」

「好きで居続けることと、忘れること。どっちが痛いのかな」

その言葉に、僕は答えを返すことが出来なかった。友菜も、僕に答えなんて求めてなかった。その答えを知るには、僕たちはあまりにも子供だった。

それから、僕たちは無言でいくつもの線香花火の火花を見守った。この二ヶ月間、友菜がはっちゃけ続けて導き出した結論を、僕は傍にある友菜の横顔を見ながら考えた。

線香花火の火花は、やがて音もなく消えていった。

12・始まりに向けて

花火を全て終え、旅立ちの儀式が進んでいくのに比例して、僕の中の不安も大きくなっていった。この不安は友菜に向かうものではなくて、僕自身に向かうものだった。今まで、ずっと僕はこんな不安を胸に抱いていた。それは、胸がきゅんと痛いとかいう種類の感情ではなかった。

ああ、好きななんだろうな。

そんな風に他人行儀な感情を押し殺したのはいつからだったろう。素直に後先を考えずに友菜に関わろうとするには、僕は少しだけ大人だった。でも、上手く接することが出来ずに、結局無関心を装うことしか出来ないほどには、子供だった。

この不安を胸に抱いたまま、僕は友菜の答えを待っている。その答えが僕に及ぼす影響は想像もつかない。加速していく不安に、ただ不安を募らせることしか、僕には出来なかった。

花火がきれると、友菜はあらかじめ決められた行動に従うようにベンチに置かれたナップサックの中からあるものを取り出した。それを見て、僕はこれから友菜がしようとしていることを察した。それが答えに直通しているのかは、友菜の顔からは読み取れなかった。

表紙を無数のハートマークに彩られた日記帳。それは、僕たちが家族になって初めて、父さんが友菜の誕生日に送ったものだ。思春期に入ったばかりの女の子の間違って気を遣った僕と父さんは、とにかく書店に並んでいる中で一番派手で可愛い日記帳を選んだ。今思えば、それは友菜の嗜好からはかけ離れていた。それでも、友菜

は父さんからの贈り物をありがとつ、と言って受け取り、それからずっとその日記帳を愛用しているらしかった。その誕生日プレゼントを、僕も一緒に選んだことを友菜は知らない。知られるのが照れくさくて、僕は父さんに口止めをしておいた。

あれから時間を重ねた分だけ溜まった日記帳を、友菜は胸に抱いて僕の方へ歩いてきた。数えると、その日記帳は五冊。その中に詰め込まれた友菜の気持ちを汲み取ることは出来なかったけど、直視することは出来なかった。視線を逸らすと、その拍子に友菜と目が合った。

「全部、燃やすから」

自分に言い聞かせるように友菜は言った。僕は「そう」と返事を返すことしか出来なかった。自分の気持ちに立ち向かっていく女の子を前にして、僕はその肩を抱いてやることも出来ずに、その行為を見守ることしか出来ない。その事実痛む胸を、僕は心の中でなを今更、と一人ごちてやり過ごした。

地面にしゃがみこんだ友菜は、日記帳を地面に重ねて置いてから、マッチを擦った。少しの間、友菜は指で摘んだ火種をじっと見つめた。僕は、友菜の後ろに立って、そんな友菜の頼りない背中を見つめた。

ぼとりと日記帳の上に落ちた火種は、徐々に徐々に大きくなって日記帳の上を踊っていく。膝を抱いた友菜はじっとその光景を見守っていた。

「笑っちゃうよね」

じつと身じろぎもせず、唐突に友菜の声が響いた。

「なにそれって感じ。耳を疑うって、多分こんな時に使うんだらうなって意味ないこと考えてたし。ってか、あんなふうに笑われたら、文句の一つも言えないでしょ。そんな筋合いなんてないんだらうけどさ」

じつと動かない細い背中を、僕は黙って眺めた。

「実は私……今、妊娠してるの」

まるで恋人に祝福を求めるように、綾菜さんが顔を赤くしながらその事実を僕に告げたのは今朝だった。驚きよりも、祝福よりも先に、僕はその事実を友菜が知ってしまったことを懸念した。恐る恐るその話を友菜にしたのかと聞く僕に、綾菜さんは無邪気な笑顔で「ええ」と肯いた。

「駄目なんだって分かってたけどさ。こんなオチはないでしょ。笑い話にしたって出来悪すぎだよ。とつくに、諦めるつもりでいたのにさ」

火が音を立てて日記帳を飲み込んでいく。そこに残された気持ちには、こんなにもアツサリと飲み込まれていく。

「ねえ。あんたは、あの人のこと恨んでないの」

「え？」

「知ってるよ。あんたの母親がおかしくなったきっかけ」

僕は、少し間を置いてから「別に恨んでないよ」と友菜の背中に声を返した。

僕も祖母から聞かされた話なので、詳しくは知らないし、当時のことはよく憶えてはいない。ただ確かなのは、父さんと綾菜さんの付き合いが不倫から始まって、そこから結婚に至るまで、様々な人が傷ついたという事実だけだ。もちろん、きっかけはそうだったのだろうけど、僕の母親がおかしくなった責任を綾菜さんと父さんに全て押し付ける気はなかった。その事実を誰かに責任として押しつけられるほど、僕の中でそれはまだ消化されてはいない。もし、消化されていたとしても、今更グれる気にもなれなかった。

奪われたことに恨みを抱くほど、母親に愛された記憶も、僕にはなかった。

僕の言葉に、友菜は何も言葉を返してこなかった。僕の答えがちらに傾いていたとしても、初めから肯定も否定もする気はなかったのだろう。友菜がどうという経緯で事実を知ったのかは、少し気になっただけど、とても聞く気にはなれなかった。

「一つ、聞いてもいいかな」

火は日記帳の半分ほどを飲み込んでいた。更に日記を侵食していく火が、全てを飲み込んでしまう前に、僕は友菜の背中に言った。

いいよ、なんて返事は返ってこなかったけど、僕は構わずに声を出した。

「父さんとは、寝たの」

抑揚のない友菜の声は、まるであらかじめ答えを用意されていたみたいに、すぐに返ってきた。

「誘惑はしたけど、寝てない」

「そう」

言葉の意味は理解できたけど、実感は伴わなかった。どちらにしろ、それを知ったからと言って僕の気持ちが悪くなることはなかった。

それから、僕たちは一言も言葉を交わさずに、日記帳が燃え尽きるのを待った。どこかから、ぐえ、と蛙の鳴き声が聞こえた。空を見上げると、それなりにロマンチックな夜空があった。

日記帳が灰になっても、友菜はじっとそこにしゃがみこんだまま、動かなかった。この行為の先に、全てを忘れられると思うほど友菜がセンチメンタルな性分じゃないことは知っていた。でも、友菜の背中を眺めていると、その条理にささやかな抵抗をしているその気持ちは、察することは出来た。

灰になった日記帳を、友菜はナップサックの中から取り出したスリッパで搦み、全てをナイロン袋の中に収めた。僕は、その行為を何も言わずに見守った。

「ねえ。もう少し付き合ってくれ」

思い出を詰め込んだナイロン袋を大事そうにナップサックにしまっている友菜は言った。

「最後まで付き合っよ」

「じゃあ、場所変えるから」

「ここじゃ駄目なの」

「論外」

「じゃあ、どこに行くの」

「海」

「海？」

「うん」

アッサリと頷く友菜を見ながら、僕は今から駅に向かって、電車に乗り込む僕たちを想像した。ここから一番近場の海を目指したとしても、僕たちがそこにつく頃には、終電の時間はとっくに過ぎてしまっただろう。でも、躊躇のない友菜を目の前にすると、なんだかそんな心配をするのも馬鹿馬鹿しく感じた。

馬鹿じゃないの、と言われる前に、僕は「いいよ」と友菜に言うて見せた。

友菜は「よし」と言って笑った。

バケツは後から取りに帰ることにして、僕たちは駅を目指して歩いた。その間に、僕は考える。

旅立ちの儀式の最後に、友菜が海を選んだわけ。この行為の先に、友菜がどこに旅立とうとしているのか。その答えは、友菜になにをもたらし、僕にどう影響するのか。

「そういえば、一つ聞きそびれてたことがあるんだ」

少し前を歩く友菜の背中を眺めながら、僕は言った。

「あの喫茶店の店名」

「残念」

友菜は振り返らずに声を返した。

「私も、聞きそびれてたの」

「そうなの」

「うん。でも、今更知ろうとは思わないけどね」

確かに、思い出の中に一つぐらい、名前の知らない喫茶店があってもいいかもしれない。そんな気になって僕はその話を止めた。

「ねえ」

「なに？」

「うん。ありがとね。色々」

友菜の抑揚のない声に、僕は「うん」とだけ声を返した。

「それとね。分かんないけど、今のうちに頼んどく。全部終わったら、私泣くかもしれないから。そのときはよろしく」

「うん」

僕は少し前を歩く友菜の足元を見ながら、返事を返した。

友菜が泣くのが先か、僕の不安が表に出るのが先か、考えてみたら、僕は意味もなく空を見上げた。

終わりではなくて、始まりに向けて僕たちは歩いている。

痛みが伴うにしても、そうすれば、きっと今より少しだけ変われると信じて。

駆け足で通り抜けていく僕たちの夏は、そんな風に始まって、何かを残して終わっていくのだろう。

視線を前に戻すと、急ぎ足で歩く友菜の背中が思ったよりもずっと遠くにあった。試しに、立ち止まってみると、友菜は一人でさき前に進んでいったけど、僕がついてきていないことに気付いてすぐに足を止めた。

振り返った友菜が、首をかしげて、僕のことを待っていた。僕は不安が胸によぎるのを感じながら、もう一度足を踏み出した。

了

12・始まりに向けて（後書き）

最後までお付き合いくださりありがとうございました。この物語を読んで、少しでも胸に残るものがあれば、一言でもいいので是非感想を残してください。

率直な感想を今後の作品に反映させていこうと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0037e/>

十六の夏

2010年10月10日21時36分発行